

あめりか・コクジン・ジョセイである事 (その2)*

—*Their Eyes Were Watching God*—

前 川 裕 治

Yuji MAEKAWA

A Study of *Their Eyes Were Watching God*

—I am an aMERICAN bLACK WoMaN—

Abstract

Deep in Americans and American Literature, there is a way of thinking that the individual should be protected from the mass. The mass is powerful and absolute. It can be seen in such examples as racism and sexism. In *Their Eyes Were Watching God*, Zora Neale Hurston tries to analyze the power of the mass from a broader viewpoint, which is the Western way of thinking, *i. e.* progress-oriented. When we look back at our history, what we have thought much of is overcoming competition. We can say the same thing of our literature, too. The writer's primary purpose is to go beyond his literary predecessor.

In a powerful mass, the existence of the individual tends to be ignored. The challenge to Janie is to secure herself from regimentation, *i. e.* to acknowledge herself as a Black woman. This is carried out by way of denying old criteria in herself and by trying to make a new interpretation of Black *Woman*. In addition to this, necessity of securing oneself appears in Nanny's unhappiness and in Janie's of fulfillment. Features of Black culture such as orality are also used to explain the need to secure the individual existence from mass power.

Janie's tendency toward self-reflectiveness looks similar to that of the modern hero(ine)s. However, they are obliged to suffer from isolation in compensation for self-acceptance. This is because their challenge for self-acceptance has been made on the basis of the Western-oriented conception. The reason why Janie does not suffer from isolation, even if she is self-reflective, is that she does not think of what happens to and about herself from a Western-oriented conception. This is indicated by the fact that she comes to have no sense of competitiveness, that she keeps quiet in the last part of this novel, and that Hurston intends to make a distance between the novel and its readers. In addition, literary forms such as call-and-response and "Free Indirect Discourse" are used very effectively to avoid the

* 本稿は1991年6月22・23日に岡山大学で行われた第20回中・四国アメリカ文学会大会での口頭発表の原稿に加筆・修正し、まとめ直したものである。尚、その1は『中・四国アメリカ文学研究』No. 28 に掲載した。

“Either/Or” way of thinking to get over the ambivalence of the modern hero(ine)s.
In this way Janie can accept herself as a part of the whole without losing herself.
[For readers' convenience, a Japanese outline of this article is shown after this.]

1. はじめに —Hurston の評価—
2. 個対集団の考え方 —アメリカ文学の源流として—
3. 集団の力の意味 —西洋的発想—
 - A 絶対的価値
 - ① racism
 - ② sexism
 - B 西洋的発想
 - C 発展第一主義
 - ① 競争意識
 - ② 物質的豊かさ
 - D 文学の中での発展第一主義
 - ① 繰り返し
 - ② 民衆文化
 - E 自己否定に拡大＝存在意義の抹殺
4. 個の確保に向けて —自由と自己定義を求めて—
 - A Janie の自己発見
 - B 新しい価値の求め方
 - ① 古い価値の打破
 - C 新しい価値の示し方
 - ① 古い価値への固執から生まれる不幸
 - ② 新しい価値の実践による充実感
 - ③ 形式の利用
5. 「個対集団」を越えて —現代人のアンビバレンスの克服—
 - A 現代人の傾向と Janie
 - ① 自己内省的
 - ② 孤独
 - ③ 一時的達成感・満足感
 - B Janie の沈黙
 - ① Pheoby との距離
 - ② 人々（読者）との距離
 - C 二者択一的考え方の否定
 - ① call-and-response
 - ② 視点の移動
 - ③ racism
 - ④ 忖意性の否定——lying thoughts
 - ⑤ 自然の力
6. おわりに —あめりか・コクジン・ジョセイである事—

5. 「個対集団」を越えて—現代人のアンビバレンスの克服—

集団の中で集団的枠に合致しないために否定されていたものを、視点を変えることでそのままのものを価値のあるものとして認めて行くという論法により、Hurstons の主人公の Janie は自己確保・自己容認を達成している。

こういう自分自身に眼を向ける方向性は Janie に限った事ではなく、抗議文学の旗頭のライトのビガーにも見られる。死の直前に彼は次のような事を言う。

‘I didn’t want to kill!’ Bigger shouted. ‘But what I killed for, I *am*! It must’ve been pretty deep in me to make me kill! I must have felt it awful hard to murder...’
(Wright 1940: 461)

ライト自身も自己内省的傾向、即ち、自分はやはり自分だという事、を考え始めていた訳で、その後彼が *Black Boy* を書いた事で、こう言った彼の自己性に対する接近を確認出来る。

しかし、この次に大切なことはビガーが孤独に陥っているという事である。彼は弁護士の Max も家族も総てを拒否して内向していく。現代のアンチ・ヒーローの自己容認の後に立ち上がるアンビバレンスは、一つにはビガーの経験するのと同じ孤独となって現れる。例えばライトの後に出了たボールドウインの *Another Country* のルーファスは黒人男という identity を受け入れつつ死という形で孤独を実践する。自分を受け入れ自己確立が出来たように見える現代のアンチ・ヒーローには一定の限界がありそうだ。この視点から言うと Janie も同じプロセスを経て来ている訳で、現代のアンチ・ヒーローと同じアンビバレンスに陥る可能性を秘めていると言える。

今まで考えて来た事は、Hurstons が個対集団という枠組みの中で自分の中の黒人性を個として探求する姿だった。しかし、この個対集団という考え方は、至って西洋的思考の枠組みである。仮に個対集団という考え方の言葉を使わないとしても、黒人の人間性の主張の中には、アンチ・ヒーローの存在の主張と同じ意識構造があると言える。即ち、強大化する組織の中での存在感の希薄化、無力感の増大といった事に対する闘い、いわゆる個人としての生への訴えなのである。こういった動きは、最初に規定したように極めて西洋的な考え方なのである。そうすると、Hurstons は西洋的考え方と闘っていたように見えて、結局、その枠内で単にしがみついていたに過ぎない、或はその罫にはまっていたことになるのであろうか。答えは否である。それは Janie がビガーやルーファスの経験する内向する孤独に陥っていない事から言える²⁰。

これは彼女が西洋的考え方の個対集団という枠組みの限界を越えていることを示している。

もう一つ大切なことは、アンチ・ヒーローが一時的に持つ達成感・満足感である。現代のアンチ・ヒーローは個対組織の構図の中で組織が個人を抹殺するものとして否定し、自己の人間性、尊厳を探し求め、仮に不十分な達成度にしても、ある一定の段階まで来ると、個人としての人間性の確保が出来たという達成感・満足感を抱く。しかし、この感慨は組織という個の相手を否定することによって生じたものである。別の言い方をすると、個と組織という二者択一²¹の世界で個を選ぶことによって生じた感慨である。これも今まで考えて来た西洋的発想なのである。

こう言った孤独感や満足感、達成感が Janie にないところも、彼女がアンチ・ヒーローを越えている部分と言える。このことを最も明確に表している所は彼女と Tea Cake との関係である。Tea Cake に関しては、評論家の間でも評価の分かれる人物だ。しかし、彼は Joe 程の強い sexist ではないにしても、基本的には Joe などと同じ意識構造を持っていたと考える方が良からう。(Janie を殴ること、ギャンブルに耽ること、金の為に命を失うことになる等) そんな Tea Cake でありながら Janie が Joe の場合と全く別の感情で接している。Joe と同じく死者となるにも拘わらず、Joe の場合は彼を踏み台として自分の成長に突き進みながら、Tea Cake の場合は死者としてすら Janie は扱わない。即ち、相手を否定する事で目的を達成するという方法の無意味さを知った者の行動なのである。

こういう考え方は Janie の「沈黙」にも表れている。この沈黙を考えるには Pheoby の存在が極めて重要である。Janie が Pheoby に総てを語った後、沈黙が二人の間にあり、Janie はさっさと一人で二階の自分の部屋に行ってしまう。これにより二人の間の距離は、沈黙の時に比べて一層広がっている。即ち、自らの経験を語るという役割を終えた彼女は Pheoby に対して聞き手である以上の事は自分からは要求しない。これに加えて、彼女の語りが Pheoby という人物を通して行われている為に、Carby (1990: 83-84) の言うように、Janie と人々との距離が生まれている事に注意しなければならない。これも Pheoby に対する彼女の沈黙と同じ意味を持っていると思える。即ち、距離を造ることで、人々の独自性を尊重出来るようになる。これは経験が Janie によって語られても、それを生かすかどうかは Pheoby にかかっていたのと同じである²²。Pheoby も人々も、Janie による (Hurston による) 考え方の面で直接的支配を受ける事がなくなる。即ち、彼らは独自の判断をする事が出来る。相手を否定するのではなく、相手を認めることを前提とする態度がここにはある²³。

前章で簡単に説明した、黒人の価値の位置付けの為の構造的なアプローチも今の個対集団の枠組みの限界を考える時、重要な意味を持って来る。それはこう言った構造が個対集団という対立的概念を越える要素を包含しているからである。

例えば, call-and-response について考えてみよう。

Antiphonal back-and-forth pattern which exists in many African American oral traditional forms, from sermon to interjective folktale to blues, jazz and spirituals, and so on. In the sermonic tradition, the preacher calls in fixed or improvised refrains, while the congregation responds, in either fixed and formulaic or spontaneous words and phrases. In oral storytelling the listeners may interject their commentary in a modified call-and-response pattern derived from African musical tradition.

In the literary text both dialogue and plot structure may demonstrate this call-and-response pattern: one scene may serve as a commentary on a previous scene while a later scene becomes a commentary or response to that one. [My underlines] (Jones 1991: 197)

Jones がここで言っている call-and-response の特質は暗示的である。即ち、話し手がいつの間にか聞き手になり、聞き手がいつの間にか話し手になるのである。ここには一定の定まった役割も用をなさなくなってくる事が分かる。同じ事が circular 構造でも言える。Janie が自分の経験を Pheoby に話している時、Pheoby は聞き手でも、その話を Hurston に話している時の彼女は話し手である。Hurston の役割も同じように聞き手と話し手の両方を担っている事が分かる。即ち、その人物に話し手聞き手と言った限定的役割を付加する事に意味がないことが分かる。

こういった考えが Hurston の中に基本的にあった事が *Mules and Men* という作品の中に見られる視点が移動する面からも窺える²⁴。

Folk-lore is not as easy to collet as it sounds. The best source is where there are the least outside influences and these people, being usually under-privileged, are the shyest. They are most reluctant at times to reveal that which the soul lives by. And the Negro, in spite of this open-faced laughter, his seeming acquiescence, is particularly evasive. You see we are a polite people and we do not say to our questioner, “Get out of here!” We smile and tell him or her something that satisfies the white person because, knowing so little about us, he doesn’t know what he is missing. The Indian resists curiosity by a stony silence. The Negro offers a feather-bed resistance. That is, we let the probe enter, but it never comes out. It gets smothered under a lot of

laughter and pleasantries.

The theory behind our tactics: “The white man is always trying to know into somebody else’s business. All right, I’ll set something outside the door of my mind for him to play with and handle. He can read my writing but he sho’ can’t read my mind. I’ll put this play toy in his hand, and he will seize it and go away. Then I’ll say and sing my song.” [My underlines] (Hurstons 1935: 4-5)

即ち、語る時の視点がいつの間にか三人称から一人称へ、別な言い方をすると、間接話法的視点から直接話法的視点に変わってしまっている。つまり人称による区別を明確にしない事で、視点の混乱を生じさせ、Hurstons の考えていた二者択一的発想を否定する方向性を際立たせる事に成功している。

これと同じ事が *Their Eyes* 中では、全体的に起こっていることを考えると、Hurstons がこういった技巧によって二者択一的考え方を否定するメッセージを伝えようとしていたと考える事ができる²⁵。

二者択一的考え方の否定は、白人対黒人という racism にも適用される。洪水の後の Palm Beach で死体の処理を無理矢理手伝わされる Tea Cake を描く時この事は明確に示される。

“Shucks! Nobody can’t tell nothin’ ’bout some uh dese bodies, de shape dey’s in. Can’t tell whether dey’s white or black! (Hurstons 1937: 235)

死体が洪水によって白人か黒人か区別が付かなくなっているということを描く事によって、racism がいかに無意味な、人間の根本には何の役にも立たない基準であるかが象徴的に示される²⁶。男女の区別にしても、男とはこうあるべきだとか女とは…という性的な枠がいかに恣意的な枠であるかという事は、Joe と生活する Janie と Tea Cake と生活する Janie を比べてみれば分かる事である。こう考えて来ると、二者択一的意識構造がいかに人間の都合に合わせたものであるかが分かって来る。即ち、人間の恣意が根底にあって、それによって世の中の基準なり枠が造られ、それでいて人間を規定してきたと言える。Hurstons が基本的に抵抗していたのはこの人間の中にある恣意性だったという言い方も出来る事が分かる。彼女はこれを *Their Eyes* の中では “lying thoughts” (Hurstons 1937: 278) という言葉を使って表している。

こう言った恣意性を克服するには、人間の恣意の及ばない物が必要になって来る。これが、作品全体のムードを彩っている自然の力である。ハリケーンによる洪水が示したように、人間

による恣意は自然の力の前には何の役にも立たない。自然の前では、黒人や白人の区別も、男とか女とか言った区別も、個人として孤独に生きているとか集団側に立って生きていると言った事も、何の意味もない。それだけ自然は人間の力の及ばない、絶対的な力を持っている。この自然こそが二者択一の意識構造を越えるものであり、二者をつなぐものなのである。

6. おわりに—あめりか・コクジン・ジョセイである事—

このように考えると、Hurstons の探求していた黒人女性とは一体何だったのかという事になる。結局、彼女の黒人性は全体の中に飲み込まれてしまう事になるのではないかと思いたくなる。しかしそうではないことを彼女は *Dust Tracks on a Road* の中で説明している。

So Race Pride and Race Consciousness seem to me to be not only fallacious, but a thing to be abhorred. It is the root of misunderstanding and hence misery and injustice. (326)

After all, the word “race” is a loose classification of physical characteristics. It tells nothing about the insides of people. Pointing at achievements tells nothing either. Races have never done anything. What seems race achievement is the work of individuals. [My underlines] (Hurstons 1942: 325)

Hurstons は race と Race を区別して使おうとしている。即ち、race, つまり、自分の identity は保持する必要はあるが、全体の枠として「人種」(Race) という枠は不必要なのだと考えている²⁷。

Their Eyes の中で Hurstons が多用する “Free Indirect Discourse” (即ち、今まで「視点の移動」という言い方で説明したことだが)²⁸を説明する Johnson and Gates (1987: 75-76) は、今考えている事に関して、大切な指摘をしている。それは、“Free Indirect Discourse” という事は視点が一人称から三人称に単に変わったのではなく、一人称も含めた三人称の視点になっているという所である²⁹。

Free indirect discourse is not the “voice” of both a character and a narrator; rather, it is a bivocal utterance, containing elements of both direct and indirect speech. (Johnson and Gates: 75-76)

即ち, Janie は彼女自身を失う事なく全体の一部に成る事が出来るのである³⁰。

W. E. B. DuBois は白人的面を意識して, 黒人の中に歴史的に double-consciousness があると言った (DuBois 1965: 215)。Janie の成長はこの自己の中の二重性³¹を両方とも自分自身として認めるべきだという認識に至った事である。このことは自分の中の自己性と同時に他者性も自分自身の一部として認めることを意味している。

こう言った認識は, Langston Hughes が持っていた混血の苦しみ, 即ち, 自分の中に白人の血が混じっている事から来る ambivalence に通じるものなのである。また, Hurston がたどりついた全体を重視しつつ個人性を保とうとする考え方は, かつて James Baldwin がアメリカ黒人の事を “hybrid” (Baldwin 1955: 104) という言葉で形容したことにも通じる³²。

Hurston が考える事は, ステップとして白人や黒人が抱える racism であり, 男や女が抱える sexism であっても, 究極的には, 人間の生き方³³である。作品では直接的には出て来ない面だが, それを最も近いところで支えているのは, 自分はアメリカ人であり, 一人のアメリカ人としてアメリカを愛しているという意識である³⁴。彼女はアメリカ人であるという意識について次のように言う。

Being an American, I am just like the rest of the Yankees, the Westerners, the Southerners, the Negroes, the Irish, the Indians, and the Jews. I don't lead well either. (Hurston 1942: 330)

Janie は Tea Cake との思い出深い Everglades を後にしてわざわざ Eatonville に戻って来る。そこには彼女の Eatonville という community の一員たらしめる意欲がある。この気持ちは Hurston にとってのアメリカ人たらしめる気持ちと同じものなのである。こうして Janie は, Hurston は, アメリカ黒人女性は「あめりか・コクジン・ジョセイ」になるのである。

Notes

20. 孤独的でない点は前章の黒人的面の説明と同じである。orality も相手との協調性がないと成立しない事であり, circular 構造も心の通じ合いが前提となる。
21. either/or の考え方は Wainwright (1989: 241) が参考になる。Hurston (1942: 61) で二者択一では人間の理解は出来ないことを強調している。
22. Janie は Pheoby に自分の経験を更に他人に語ることを自分は強制しないと言っている。
 “Ah don't mean to bother wid tellin' 'em nothin', Pheoby. 'Tain't worth de trouble. You can tell 'em what Ah say if you wants to. Dat's just de same as me 'cause mah tongue is in mah friend's mouf.” (Hurston 1937: 17)

23. これは「語り」の構造を好むニヒリストや文章を極端に簡潔化する傾向のあるミニマリストにも言える事で、読者との距離を作者が意図的に遠ざけて、突き放しているようで、実は読者の創造性、独創性に重きを置いていたのと同じ考え方である。
24. Gates (1988: 248-251) はこう言った傾向の語りを “Free Indirect Discourse” と言っている。一人称と三人称、つまり直接話法と間接話法の混じったものとして評価している。同じことが *The Color Purple* でも起きている事を指摘している。
25. *Their Eyes* の例は注28に示してある。
26. Hurston (1942: 325) で「人種」とは loose な区分で人間には役に立たないと言っている。
After all, the word “race” is a loose classification of physical characteristics. It tells nothing about the insides of people. Pointing at achievements tells nothing either. Races have never done anything. What seems race achievement is the work of individuals. [My underlines]
27. Johnson (1984: 212) によると、自己のなかの二つの自分を認める事が大切だという事である。
Knowing how not to mix them [inside and outside in her self-division] is knowing that articulate language requires the co-presence of two distinct poles, not their collapse into oneness.
28. Gates は “Free Indirect Discourse” と言っている。以下が *Their Eyes* の中に出て来る discourse の例で, direct, indirect, free indirect と続く。
“Jody,” she smiled up at him, “but s’posin—”
“Leave de s’posin’ and everything else to me.” (50)

The vision of Logan Killicks was desecrating the pear tree, but Janie didn’t know how to tell Nanny that. (28)

Joe Starks was the name, yeah Joe Starks from in and through Georgy. Been workin’ for white folks all his life. Saved up some money—round three hundred dollars, yes indeed, right *here* in his pocket. Kept hearin’ ’bout them buildin’ a new state down heah in Floridy and sort of wanted to come. But he was makin’ money where he was. But when he heard all about ’em makin’ a town all outa colored folks, he knowed dat was de place he wanted to be. He had always wanted to be a big voice, but de white folks had all de say so where he come from and everywhere else, exceptin’ dis place dat colored folks was buildin’ theirselves. Dat was right too. De man dat built things oughta boss it. Let colored folks build things too if dey wants to crow over somethin’. He was glad he had his money all saved up. He meant to git dere whilst de town wuz yet a baby. He meant to buy in big. (47-48)

29. この視点の移動に関しては評価の分かれる所で、その火付け役は Stepto で、彼は三人称になる事で Janie の自己性が弱まり、彼女の自立が達成されたと示そうとする Hurston の意図を結局損なう事になっていると指摘している。

The one great flaw in *Their Eyes* involves not the framing dialogue, but Janie’s tale itself. Through the frame Hurston creates the essential illusion that Janie has achieved her voice (along with everything else), and that she has even wrested from menfolk some control of the tribal posture of the storyteller. But the tale undercuts much of this, not because of its content—indeed, episodes such as the one in which Janie verbally abuses Jody in public abets Hurston’s strategy—but because of its narration. Hurston’s curious insistence on having Janie’s tale—her personal history in and as a literary form—told by an omniscient third person, rather than by a first-person narrator, implies that Janie has really won her voice and

self after all—that her author (who is, quite likely, the omniscient narrating voice) cannot see her way clear to giving Janie her voice outright On one hand, third-person narration of Janie's tale helps to build a space (or at least the illusion of a space) between author and character, for the author and her audience alike; on the other hand, when told in this fashion control of the tale remains, no matter how unintended, with the author alone. (Stepito 1987: 7)

30. Gates は *The Signifying Monkey* (1988) の中で今の事を更に明確に断定している。

Hurston uses free indirect discourse not only represent an individual character's speech and thought but also to represent the collective black community's speech and thoughts,.... (214)

31. Janie は inside と outside という言い方をしている。

She found that she had a host of thoughts she had never expressed to him, and numerous emotions she had never let Jody know about. Things packed up and put away in parts of her heart where he could never find them. She was saving up feelings for some man she had never seen. She had an inside and an outside now and suddenly she knew how not to mix them. (112-113)

32. Baldwin はその後アメリカ白人に失望して, *The Fire Next Time* を書く。

33. Hurston は *Dust Tracks* で次のように言う。

What I wanted to tell was a story about a man, and from what I had read and heard, Negroes were supposed to write about the Race Problem. I was and am thoroughly sick of the subject. My interest lies in what makes a man or a woman do such-and-so, regardless of his color. It seemed to me that the human beings I met reacted pretty much the same to the same stimulie. [My underlines] (206)

34. アメリカという国に対する愛着を Hurston が持っていた事が分かる。

Being human and a part of humanity, I like to think that my own nation is more just than any other in spite of the facts on hand. It makes me feel prouder and bigger to think that way. (Hurston 1942: 337)

References

- Awkward, Michael. "Introduction" in *New Essays on Their Eyes Were Watching God* ed. by Michael Awkward (Cambridge University Press, 1990) 1-28.
- Awkward, Michael. *Inspiriting Influences Tradition, Revision, and Afro-American Women's Novels* (Columbia University Press, 1988).
- Baker, Jr., Houston A. *Modernism and the Harlem Renaissance* (University of Chicago Press, 1987).
- Baker, Jr., Houston A. "Ideology and Narrative Form in Zora Neale Hurston's *Their Eyes Were Watching God*" of *Modern Critical Interpretations* ed. by H. Bloom (Chelsea House Publishers, 1987) 35-40.
- Baker, Jr., Houston A. et al eds. *Afro-American Literary Study in the 1990s* (University of Chicago Press, 1989).
- Baldwin, James. *Notes of a Native Son* (A Bantom Book, 1955 (1968)).
- Baldwin, James. *Tell Me How Long the Train's Been Gone* (Dell Publishing Co., Inc., 1968).
- Bass, George Houston. "Another Bone of Contention: Reclaiming Our Gift of Laughter" in *Mules Bone A Comedy of Negro Life* by Langston Hughes and Zora Neale Hurston and ed. by George Houston Bass and Henry Louis Gates, Jr. (Harper Perennial, 1991) 1-4.

- Bethel, Lorraine. "This Infinity of Conscious Pain: Zora Neale Hurston and the Black Female Literary Tradition" in *All the Women Are White, All the Blacks Are Men, But Some of Us Are Brave: Black Women's Studies* (The Feminist Press, 1982) 176-188.
- Bone, Robert A. *The Negro Novel in America (Revised Edition)* (Yale University Press, 1965 (1970)).
- Bone, Robert A. *Down Home: Origins of the Afro-American Short Story* (Columbia University Press, 1975 (1988)).
- Butler-Evans, Elliott. *Race, Gender, and Desire Narrative Strategies in the Fiction of Toni Cade Bambara, Toni Morrison, and Alice Walker* (Temple University Press, 1989).
- Callahan, John F. *In the African-American Grain: The Pursuit of Voice in the Twentieth-Century Black Fiction* (University of Illinois Press, 1988).
- Carby, Hazel V. "The Politics of Fiction, Anthropology, and the Folk: Zora Neale Hurston" in *New Essays on Their Eyes Were Watching God* ed. by Michael Awkward (Cambridge University Press, 1990) 71-94.
- Chinosole. "Audre Lorde and Matrilineal Diaspora: moving history beyond nightmare into structures for the future..." in *Wild Women in the Whirlwind Afro-American Culture and the Contemporary Literary Renaissance* ed. by Joanne M. Braxton et al. (Rutgers University Press, 1990) 379-394.
- Christian, Barbara. *Black Women Novelists: The Development of a Tradition, 1982-1976* (Greenwood Press, 1980).
- Christian, Barbara. *Black Feminist Criticism Perspectives on Black Women Writers* (Pergamon Press, 1985).
- Coles, Robert A. and Diane Isaacs. "Primitivism as a Therapeutic Pursuit: Notes Toward a Reassessment of Harlem Renaissance Literature" in *The Harlem Renaissance: Revaluations* ed. by Amritjit Singh et al. (Garland Reference Library of Humanities Vol. 837 Garland Publishing, Inc., 1989) 3-12.
- Conn, Peter. *Literature in America: An Illustrated History* (Cambridge University Press, 1990).
- Cooke, Michael G. *Afro-American Literature in the Twentieth Century: The Achievement of Intimacy* (Yale University Press, 1984).
- Dixon, Melvin. *Ride Out the Wilderness Geography and Identity in Afro-American Literature* (University of Illinois Press, 1987).
- DuBois, William E. B. *The Souls of Black Folk* in *Three Negro Classics* (Avon Book Division, 1965 (1969)) 207-390.
- Duplessis, Rachel Blau. "Power, Judgment, and Narrative in a Work of Zora Neale Hurston: Feminist Cultural Studies" in *New Essays on Their Eyes Were Watching God* ed. by Michael Awkward (Cambridge University Press, 1990) 71-94.
- Gabbin, Joanne V. "A Laying On of Hands: Black Women Writers Exploring the Roots of Their Eyes Folk and Cultural Tradition" in *Wild Women in the Whirlwind Afro-American Culture and the Contemporary Literary Renaissance* ed. by Joanne M. Braxton et al. (Rutgers University Press, 1990) 246-263.
- Gates, Jr., Henry Louis. *Figures in Black Words, Signs, and the "Racial" Self* (Oxford University Press, 1987).
- Gates, Jr., Henry Louis. *The Signifying Monkey A Theory of African-American Literary Criticism* (Oxford University Press, 1988).
- Gates, Jr., Henry Louis ed. *Black Literature and Literary Theory* (Methuen, 1984).

- Gates, Jr., Henry Louis. "A Tragedy of Negro Life" in *Mules Bone A Comedy of Negro Life* by Langston Hughes and Zora Neale Hurston and ed. by George Houston Bass and Henry Louis Gates, Jr. (Harper Perennial, 1991) 5-24.
- Gayle, Jr., Addison ed. *Black Expression Essays by and about Black Americans in the Creative Arts* (Weybright and Talley, 1969).
- Giddings, Paula. *When and Where I Enter... The Impact of Black Women on Race and Sex in America* (William Morrow and Company, Inc., 1984).
- Hassan, Ihab. *Radical Innocence: Studies in the Contemporary American Novels* (Princeton University Press, 1973).
- Hemenway, Robert E. *Zora Neale Hurston: A Literary Biography* (University of Illinois Press, 1977 (1978)).
- Hemenway, Robert. "Their Personal Dimention in *Their Eyes Were Watching God*" in *New Essays on Their Eyes Were Watching God* ed. by Michael Awkward (Cambridge University Press, 1990) 29-50.
- Henderson, Mae Gwendolyn. "Speaking in Tongues: Dialects, and the Black Woman Writer's Literary Tradition" in *Reading Black, Reading Feminist A Critical Anthology* ed. by H. L. Gates, Jr. (A Meridian Book, 1990) 116-142.
- Hill, Herbert ed. *Anger, And Beyond The Negro Writer in the United States* (Harper and Row, Publishers, 1966).
- Hite, Molly. "Romance, Marginality, and Matrilineage: *The Color Purple* and *Their Eyes Were Watching God*" in *Reading Black, Reading Feminist A Critical Anthology* ed. by H. L. Gates, Jr. (A Meridian Book, 1990) 431-453.
- Holloway, Karla F. C. *The Character of the Word: The Texts of Zora Neale Hurston* (Greenwood Press, 1987).
- Howard, Lillie. *Zora Neale Hurston* (Twayne Publishers, A Division of G. K. Hall and Co., 1980).
- Hughes, Carl Milton. *The Negro Novelist 1940-1950* (The Citadel Press, 1953 (1970)).
- Hull, Gloria T. et al eds. *All the Women Are White, All the Blacks Are Men, But Some of Us Are Brave: Black Women's Studies* (The Feminist Press, 1982).
- Hurston, Zora Neale. *Moses, Man of the Mountain* (University of Illinois Press, 1939 (1984)).
- Hurston, Zora Neale. *Dust Tracks on a Road—An Autobiography* Second Edition (University of Illinois Press, 1942 (1984)).
- Hurston, Zora Neale. *Jonah's Gourd Vine* (Virago Modern Classics, 1934 (1987)).
- Hurston, Zora Neale (中村輝子他訳). *Mules and Men* (Negro University Press, 1969 (1935)) (『語りつぐ』 女たちの同時代 北米黒人女性作家選⑦ 朝日新聞社, 1982, 3-190).
- Hurston, Zora Neale. *Their Eyes Were Watching God* (University of Illinois Press, 1937 (1978)).
- Hurston, Zora Neale. *Seraph on the Suwanee* (Charles Scribner's Sons, 1948 (AMS Edition 1974)).
- Ingram, Elwanda Deloris. "BLACK WOMEN: LITERARY SELF-PORTRAITS" (A Dissertation Presented to the Department of English and the Graduate School of the University of Oregon in partial fulfillment of the requirements for the degree of Doctor of Philosophy in August, 1980).
- Johnson, Barbara. "Thresholds of Difference: Structures of Address in Zora Neale Hurston in "Race," Writing, and Difference ed. by H. L. Gates, Jr. (University of Chicago Press, 1986) 317-328.
- Johnson, Barbara. "Metaphor, metonymy and voice in *Their Eyes Were Watching God*" in *Black*

- Literature and Literary Theory* ed. by Henry Louis Gates, Jr., (Methuen, 1984) 205-220.
- Johnson, Barbara and Henry Louis Gates, Jr. "A Black and Idiomatic Free Indirect Discourse" in *Zora Neale Hurston's Their Eyes Were Watching God of Modern Critical Interpretations* ed. by H. Bloom (Chelsea House Publishers, 1987) 73-86.
- Jones, Gayl. *Liberating Voices Oral Tradition in African American Literature* (Harvard University Press, 1991).
- Joseph, Gloria I. et al eds. *Common Differences: Conflicts in Black and White Feminist Perspectives* (South End Press, 1981).
- Kramer, Victor A. ed. *The Harlem Renaissance Re-Examined* (AMS Press, 1987).
- Kubitscheck, Missy Dehn. "'Tuh de Horizon and Back': The Female Quest in *Their Eyes Were Watching God*" in *Zora Neale Hurston's Their Eyes Were Watching God of Modern Critical Interpretations* ed. by H. Bloom (Chelsea House Publishers, 1987) 19-34.
- Lowe, John. "Hurston, Humor, and the Harlem Renaissance" in *The Harlem Renaissance Re-Examined* ed. by Victor A. Kramer, (AMS Press, 1987) 283-314.
- McKay, Nellie. "'Crayon Enlargements of Life': Zora Neale Hurston's *Their Eyes Were Watching God* as Autobiography" in *New Essays on Their Eyes Were God* ed. by Michael Awkward (Cambridge University Press, 1990) 51-70.
- Messe, Elizabeth. "Orality and Textuality in *Their Eyes Were Watching God* in *Zora Neale Hurston's Their Eyes Were Watching God of Modern Critical Interpretations* ed. by H. Bloom (Chelsea House Publishers, 1987) 59-72.
- Petes, Donald A. *A Spy in the Enemy's Country The Emergence of Modern Black Literature* (University of Iowa Press, 1989).
- Pryse, Marjorie et al eds. *Conjuring: Black Women, Fiction, and Literary Tradition* (Indiana University Press, 1985).
- Rampersad, Arnold. "Biography and Afro-American Culture" in *Afro-American Literary Study in the 1990s* ed. by Houston A. Baker, Jr., (University of Chicago Press, 1989) 194-207.
- Schmidt, Rita Terezinha. "'With My Sword in My Hand' THE POLITICS OF RACE AND SEX IN THE FICTION OF ZORA NEALE HURSTON" (Submitted to the Graduate Faculty of Arts and Sciences for PhD at the University of Pittsburgh in 1983).
- Smith, Barbara. "Racism and Women's Studies" in *All the Women Are White, All the Blacks Are Men, But Some of Us Are Brave: Black Women's Studies* ed. by Gloria Hull et al. (The Feminist Press, 1982) 48-51.
- Starke, Catherine Juanita. *Black Portraiture in American Fiction: Stock Characters, Archetypes, and Individuals* (Basic Books, Inc., Publishers, 1971).
- Step, Robert. "Ascent, Immersion, Narration" in *Zora Neale Hurston's Their Eyes Were Watching God of Modern Critical Interpretations* (Chelsea House Publishers, 1987) 5-8.
- Stetson, Erlene. "Studying Slavery: Some Literary and Pedagogical Considerations on the Black Female Slave" in *All the Women Are White, All the Blacks Are Men, But Some of Us Are Brave: Black Women's Studies* ed. by Gloria Hull et al. (The Feminist Press, 1982) 61-84.
- Wainwright, Mary Katherine. "The Aesthetics of Community: The Insular Black Community as Theme and Focus in Hurston's *Their Eyes Were Watching God*" in *The Harlem Renaissance: Revaluations* ed. by Amritjit Singh et al. (Garland Publishing Inc., 1989) 233-244.
- Walker, Alice. "Looking for Zora" in *In Search of Our Mothers' Gardens* (HBJ, Publishers, 1983) 93-116.

- Walker, Alice. *I Love Myself When I Am Laughing ... And Then Again When I Am Looking Mean And Impressive: A Zora Neale Hurston Reader* (The Feminist Press, 1979).
- Walker, Alice. “Zora Neale Hurston: A Cautionary Tale and a Partisan View” in *In Search of Our Mothers' Gardens* (HBJ, Publishers, 1983) 83-92.
- Wall, Cheryl A. ed. *Changing Our Words: Essays on Criticism, Theory, and Writing by Black Women* (Rutgers University Press, 1989).
- Washington, Mary Helen. “Teaching *Black Eyes Susans*: An Approach to the Study of Black Women Writers” in *All the Women Are White, All the Blacks Are Men, But Some of Us Are Brave: Black Women's Studies* ed. by Gloria Hull et al. (The Feminist Press, 1982) 208-217.
- Watson, Carole McAlpine. *Prologue: The Novels of Black American Women, 1891-1965* (Greenwood Press, 1985).
- コーエン, ヘニング「アメリカ文学とアメリカの民間伝承」『アメリカの大衆化』トリストラム・P・コフィン編, 大島良行訳 (研究社, 1973).
- ハーストン, ゴラ・ニール, ルシール・クリフトン (中村輝子他訳)『語りつぐ』女たちの同時代 北米黒人女性作家選⑦ (朝日新聞社, 1982).
- ヒューズ, ラングストン (木島始訳)『Langston Hughes 自伝 I』(河出書房新社, 1975).
- ボールドウィン, ジェイムズ, ニッキ・ジョバンニ (連東孝子訳) *A Dialogue* (『われわれの家系』) 晶文社, 1973 (和訳1977).
- 浦川直子「ゴラ・ニール・ハーストンの復権」『英語青年』1991年4月号. 22-24.
- 岩元 巖『現代のアメリカ小説——対立と摸索』(英潮社, 1974).
- 亀井俊介『荒野のアメリカ』(南雲堂, 1989).
- 蟻 二郎『アメリカのニグロ作家たち』(太陽社, 1966).
- 橋本福夫『黒人文学の世界』(未来社, 1967).
- 橋本福夫編『黒人文学全集——全13巻』(早川書房, 1970).
- 古川博巳『黒人文学入門』(創元社, 1973).
- 前川裕治「Zora Neale Hurston 研究一人と作品」広島女学院大学『論集』通巻40集, 1990. 77-121.
- 大内義一『アメリカ黒人文学』英米文学シリーズ2 (評論社, 1974).
- 大内義一『黒人の文学』(松柏社, 1967).
- 大内義一他著『アメリカ黒人の文学』(早稲田大学出版部, 1978).
- 渡辺和子他編『現代アメリカ女性作家の深層』(ミネルヴァ書房, 1984).
- 風呂本惇子『アメリカ黒人文学とフォークロア』(山口書店, 1986).
- 北村崇郎『黒人文学——アフリカからアメリカへ』(日本放送出版協会, 1972).
- 北村崇郎他著編『黒人文学の周辺——シンポジウム』(研究社, 1973).
- 鈴木三喜男 “‘Black Love’ の追求—Hurston の *Their Eyes Were Watching God*—”『教養諸学研究』7 (早稲田大学政治経済学部教養学研究会, 1982).